

一 橋 学 会 報

一橋大学哲学・社会思想学会会報 No. 16
(「研究会便り」より通算第44号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会

発行所 一橋大学哲学・社会思想学会事務局

tel./fax 042-580-8644

〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内

Email: phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp

第14回一橋大学哲学・社会思想学会

(研究会より通算第44回)

【日 時】 2013年12月7日(土) 9:50 開場

【場 所】 一橋大学 第3研究館研究会議室(東キャンパス内)

【個人研究発表】 10:00~14:30

10:00~11:00

五十嵐 舞(一橋大学大学院社会学研究科修士課程) 司会:井川 ちとせ
「トラウマティックな歴史性をもつ他者への「呼びかけ」に対し、
わたしたちが負うことの可能な『応答/責任』とは」

11:10~12:10

守 博紀(一橋大学大学院言語社会研究科修士課程) 司会:井頭 昌彦
「きめ細やかに認識するための概念とのつきあい方について
——アドルノの『否定弁証法』と音楽論を手掛かりに——」

13:30~14:30

森田 博之(一橋大学大学院社会学研究科修士課程) 司会:馬場 智一
「『全体性と無限』における「分離」について」

【シンポジウム】 15:00～18:00

「3.11の社会哲学」

司会：加藤 泰史（一橋大学大学院社会学研究科・教授）

『人文学にもとづくカタストロフィの解釈・思考・表象』

西山 雄二（首都大学東京 都市教養学部・准教授）

『ポスト3.11の人間の地位』

——ハイデガー、アンダース、デュピュイ、ナンシー——

渡名喜 庸哲（東洋大学 国際哲学研究センター・研究助手）

『世代問題の再燃——3.11以後』

森 一郎（東京女子大学 現代教養学部・教授）

【懇親会】 総会終了後

【目次】

個人研究発表	レジュメ（五十嵐舞氏）	3頁
個人研究発表	レジュメ（守博紀氏）	4頁
個人研究発表	レジュメ（森田博之氏）	5頁
シンポジウム	趣意書	6頁
シンポジウム	発表者レジュメ（西山雄二氏）	6頁
シンポジウム	発表者レジュメ（渡名喜庸哲氏）	7頁
シンポジウム	発表者レジュメ（森一郎氏）	8頁
	この春就職した人から（赤石憲昭氏）	9頁
	研究発表募集のご案内	10頁

研究発表

トラウマティックな歴史性をもつ他者への「呼びかけ」に対し、わたしたちが 負うことの可能な『応答／責任』とは

五十嵐 舞（一橋大学大学院社会学研究科修士課程）

他者へ自己の痛みについて語る／語られるとき、その「痛み」が理解されずに否定される／するということがある。本研究は、「痛み」の承認の恣意性に注目し、「治療」の対象となっている PTSD と、そのようには名付けられていない「痛み」を一度、同じ線の上に連続するものとして捉え直し、こうした他者の痛みを否定する構造の分析及び、そういった問題（本研究では「痛み」の非承認を暴力的なこととして捉える。）への倫理的な態度について主にジュディス・バトラーの思想を手掛かりに模索する試みである。

研究方法は、自身も第二次大戦への従軍経験から PTSD のような症状に苦しめられた作家、J.D.サリンジャーによる、除隊した兵士「私／X」の PTSD 体験を描いた短編” For Esmé - with love and squalor” と、従軍体験はないものの、精神的な大きなショックを抱える少年ホールデン・コールフィールドを主人公にした *The Catcher in the Rye* を分析の対象とし、両者の表象の共通性から、PTSD と名付けられる痛みと、そうではない痛みの非承認の構造の連続性を見出し、そしてジュディス・バトラーの「悲嘆可能性」概念を中心に、トラウマ研究との参照を通じて倫理的態度の考察をする。最初に、ある主体の、ある「痛み」が「痛み」として承認されないその構造について分析だが、まず、バトラーが『戦争の枠組』において論じる「悲嘆可能性」概念をめぐり、「生きた生」と「亡霊のような生」という視点から両作品の表象を読み解く。そして「承認可能性」や「理解可能性」「感知」などの点から、既読み解いた表象の構築経緯を明らかにし、同時に両作品において描かれる「救い」の正体の分析から、痛む主体の回復への契機を検討する。そして、以上を踏まえ、ある種の「痛み」を認めない構造、枠組にどのように抵抗していくか、またわたしたちはそのような構造の中でいかにして倫理的主体でありうるかということを考えていく。まず、バトラーの「パフォーマンスティヴィティ」概念の観点から、痛む主体自体が持ち得る枠組への抵抗の可能性とその限界を模索する。そして、バトラーの「生のあやうさ」を基礎とした倫理的態度の示唆や、「被傷性」と中傷発話に関する議論を、臨床をもとにしたトラウマ研究などつなげ、痛みの経験の記憶から回復するということと、わたしたちが持ち得る／持つべき「応答／責任」について模索していく。

結論としては、端的には、「生のあやうさ」ゆえに、既に「痛み」の承認をめぐる構造に巻き込まれているわたしたちは、痛む主体へそれがどのように痛むのか問いかけてゆくと同時に、「聴くに値するとされる発話」や、自明視されている情動働きの「枠組」を問い直すことを通して、痛む主体が「痛み」を語れることを可能にしていくような場を創出していくということである。

きめ細やかに認識するための概念とのつきあい方について
——アドルノの『否定弁証法』と音楽論を手掛かりに——

守 博紀 (一橋大学大学院言語社会研究科修士課程)

本発表の問いは、きめ細やかに認識するためにはどのように概念とつきあったらよいか、というものである。そのさい論点を明確にするために、本発表において発表者は、Th. W. アドルノがこの問いに対してどのように答えるだろうかということを、『否定弁証法』(1966年)およびこの著作と同時期に発表された音楽に関する論考を参照しながら考えたい。

本発表のこの問いに対し、そもそもきめ細やかに認識するために概念について考えるということが問いの立て方として間違っている、という考え方もありうるだろう。というのもこの考え方によれば、概念によっては捉えられないものを感知するような認識こそがきめ細やかであると呼ぶにふさわしいものであるからである。こうした考え方は直観的には理解しやすい。そしてまたアドルノもこの考え方に半分は同意する。しかしアドルノは同時に、きめ細やかであるためには概念とのつきあいもまた不可欠である、と考えていた。そのように考えるならば次は、どのように概念とつきあえばよいか、どのような意味でそれが不可欠なのか、ということが問題になるはずである。そこで本発表においては、こうした論点からアドルノの認識論における概念の位置づけを解明し、冒頭の問いが無意味な問いではないこと、そしてこの問いへの答えが概念とのよりよいつきあい方を考える上で有益な示唆をもたらしてくれること、こうしたことを示したいと思う。

また、本発表において発表者が『否定弁証法』と音楽論を両方参照することには理由がある。それは、『否定弁証法』の中にはいくつか音楽に関する言及があり、とりわけ概念使用をめぐる議論においてアドルノが音楽との類比を用いて説明を加えている箇所がある、ということである。このことは、『否定弁証法』における抽象的な議論が、アドルノの音楽論を参照することによってより実質的に理解できるようになるのではないか、という見込みを与える。とりわけ、アドルノの音楽論(とりわけ音楽と言語の関係についての議論や音楽における形式と図式の対比をめぐる議論)は、アドルノの音楽理解を示す議論としてのみならず、アドルノがどのように概念を理解しようとしていたかということについての議論としても読むことが可能である。それゆえ発表者は、概念についてのアドルノの議論をよりよく理解するために彼の音楽論を参照する。

見込まれる考察の成果は以下のとおりである。事柄の細部に迫るためには、形式的に定義された概念ではなく豊かな内容を含んだ概念が必要であること。ある概念を内容豊かなものとして捉えるためには、その概念を内容的につながりあう複数の概念の連関の中に位置づけなければならないこと。そしてこのことが、概念とのよりよいつきあい方のために必要な態度であることである。

『全体性と無限』における「分離」について

森田 博之（一橋大学大学院社会学研究科修士課程）

本発表では、エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限』における「分離」の概念について扱う。

『全体性と無限』においてレヴィナスは、主体の取りうる様態として「全体性を志向するもの」と「無限を志向するもの」の二つを想定している。前者は、主体の側の知的枠組みや自他を結ぶ中立的な体系、つまり全体性のうちに他者を還元し、他者から他者そのものとしての性格を奪い取る暴力的なものとして描かれる。このような全体性への志向を前提した哲学としてレヴィナスが批判するのは、パルメニデスからスピノザ、ヘーゲルに至る体系の哲学や、ハイデガーの存在論などである。これに対し後者は、他者の他者そのものとしての性格へと開かれた、倫理的な主体のあり方として描かれる。「無限なもの」とは、「観念を超えた観念」というように形容され、「規定できない」という形で消極的に規定される。しかし無限なものが超越しているという事態は、主体が「無限なもの」の観念を持つことによってはじめて可能になる。レヴィナスによれば、この「無限なもの」とは、他者そのものとしての性格が尊重された形での、「他者」であるということになる。

このように、全体性を志向する主体と無限を志向する主体の特徴は画然と区別されるのであるが、しかしその区別にもかかわらず、前者から後者へと移行する過程についての記述は、必ずしも容易かつ明快であるというわけではない。全体性から無限なものへと、主体がその志向を転換させる契機として、一体何が求められるのか。本発表ではとりわけ「分離」(séparation)の概念に着目し、まず主体が全体性に抵抗し、無限なものとしての他者に出会う諸段階を追っていくことで、この問いについて明らかにしていく。またその中で、レヴィナスの考える主体の諸性質と、主体と「他者」との関係について、一定の解答を得ることを試みたい。

以上のことを踏まえたうえで、さらに『全体性と無限』以前の著作、とりわけ『実存から実存者へ』における主体定立の議論を参照し、元基態という非人称性と、主体の定立との関係に関して、レヴィナスの思索がどのように変遷したのか、またその意義について明らかにする。その上でハイデガーの存在論における現存在的主体と対比させ、『全体性と無限』においてかなりあいまいに記述されている部分の多い存在者と存在との関係を、レヴィナスが一体どのように考えているのか、またそこでは他者との関係がどのように捉え直されているのかについて明らかにする。最後に、非人称性、全体性、他者との関係の中で、主体の定立において分離の果たす役割とその根拠について考察する。

3.11の社会哲学

趣意書

リスボン大地震に際して、ヴォルテールの詩によってオプティミズムをめぐる論争がはじまった。それはやがてルソーなどをも巻き込み、旧来のオプティミズムを葬り去ると同時に、新しい思想を準備することにもなった。これを契機に執筆されたカントの地震論は近代地震学の幕を開けたとも言われている。3.11の大厄災は、いったい何を葬り去り、何を思想的に準備することになるのだろうか。これまでも3.11については、柳田邦男の提題に対して、小島ゆかりなどの歌人が応答するといったシンポジウムや、昨年の東京大学の哲学会のシンポジウム「情報とリスク—ポスト 3.11の哲学—」が米山優や石原孝二らによって行われ、さらに今年度の日本哲学会のシンポジウム「知識・価値・社会」も一見すると3.11には関係ないように見えて、しかしそれが強く意識されて設定されたテーマである。このようにさまざまな角度から、3.11はさまざまに議論されてきた。一橋大学哲学・社会思想学会では、それを社会哲学という観点から考察するという試みとしてとりあげてみたい。しかし、社会哲学をどう定義するかについては、それぞれ各自の考察に、さらには当日の議論に委ねることにしてみたい。あるいはむしろ3.11を契機にしてどのように新たに社会哲学が展開できるのかは、かつて関東大震災に際して福田徳三が後藤新平に対して批判的な論陣を張ったという歴史的経緯を念頭に置くこととすれば、本学会のある種の責務でもあるのではなかろうか。

今回はかなりご無理を言って貴重な時間を割いて登壇していただいた三人のパネラーの先生方とともに3.11という大厄災を通して社会哲学の可能性といった問題までを射程に入れた議論を試みる。西山雄二先生（首都大学東京）には、もともとカタストロフィーという概念が文学概念であったことから、人文学におけるカタストロフィー論という観点から3.11以降の思想的課題について、渡名喜庸哲先生（東洋大学）には、ハイデガー、アンダース、デュピュイ、ナンシーらを踏まえて、現代という時代が、科学技術とそれがもたらす破局という観点からいかにとらえられるのかについて、森一郎先生（東京女子大学）には、3.11が、自然的災厄という観点からも、人為的災厄という観点からも「世代の問題」を再浮上させたことについて、ハイデガーを中心とした哲学的な世代論の観点からお話しいただく。三者に共通するのは、3.11が新たな時間性的問題を哲学・社会哲学に突きつけたということのように思われる。本シンポジウムは、こうした観点において、これまで試みられてきた、3.11に関する思想的哲学的考察に新たな方向性を切り開くものとなるだろう。

—シンポジウム発表者レジュメ—

人文学にもとづくカタストロフィの解釈・思考・表象

西山 雄二（首都大学東京・准教授）

2011年、日本社会は震災・津波・原発という、人類史上初の三重のカタストロフィ（破局）を経験した。破局的状況は、人間と自然、人間と文明、人間と歴史といった諸限界が露わになり、それらの概念や現実が根本的に再考される歴史的契機である。こうした災害に際して、自然科学や社会科学の研究者は具体的かつ実効的な支援や活躍をしてきた。人間の精神的活動を探究する人文学は、カタストロフィを前にして、いかなる学問的貢献ができるのだろうか。人文学が取り組むべきカタストロフィの論点は数多くあるが、本発表ではさしあたり、以下の基本的な論点を提示したい。

1) 概念——カタストロフィ (catastrophe) はギリシア語源では「転覆」を意味し、そもそも文学用語、とりわけ演劇用語（「大団円」「話の大詰め」）として必ずしも悲劇的な含意はなかった。18世紀頃から「悲惨で不幸な出来事」という否定的な意味のみで使用されるようになり現在に至る。人間と世界の関係をも示唆するカタストロフィ概念の変転を考察し、さらに、disaster（災厄）やrisk（リスク）といった隣接概念を比較検討する。

2) 虚構性——カタストロフィがそもそも文学的概念であった点を踏まえて、カタストロフィと虚構的現実の関係を考察すること。カタストロフィは想像しえない悲劇であるが（それゆえに）、逆にその表象は凡庸で通俗的なものとなる傾向がある。

3) 自然と文明——かつては自然災害が大量破壊をもたらしたが、技術文明が進展するにつれて、人為的要因こそがしばしばカタストロフィを引き起こしている。カタストロフィの要因は自然なのか、文明なのか、それとも両者の複雑な絡み合いなのか。カタストロフィの出来事は自然と文明の狭間にいる人間の営みを問いたす。

4) 時間性——カタストロフィは通俗的な歴史的な時間性を寸断し、予想外の出来事の到来はカタストロフィ以前／以後の切断を引き起こす。「もはやかつてと同じではありえない」「こんなことは二度と起こってはならない」と時間性が錯綜する。とりわけ、原発の事故収束や廃炉作業、拡散した核汚染物質の半減期などの時間も踏まえるならば、「3.11」の時間性はきわめて混乱している。

ポスト3.11の人間の地位——ハイデガー、アンダーズ、デュピュイ、ナンシー

渡名喜 庸哲（東洋大学国際哲学研究センター・研究助手）

「3.11」および「フクシマ」の「後で」なんらかの哲学を考えようとするとき、「前」と「後」との断絶だけでなく、アドルノがいみじくも述べたように、その「前」がいかに「後」を準備していたのか、どのような条件ないし文脈から「後」が結晶化されるにいたったのかを考えなければならないだろう。

本報告ではまず、現代の哲学者として、ジャン＝リュック・ナンシー（とくに『破局の等価性：フクシマの後で』）、ジャン＝ピエール・デュピュイ（とくに『聖なるものの刻印』）の議論を取り上げたい。両者はともに、現代における科学技術の進展がその作者である人間も統御できないようなネットワークを作り上げてしまっており諸々の「破局（カタストロフ）」の可能性もそこに内在化されるにいたっていることをそれぞれの仕方ですべて述べていったと思われる。

ただ、本報告では、彼らの考えを踏まえつつ、それがいかなる文脈に置かれているかにも注目したい。とりわけ彼らはともに、マルティン・ハイデガーが「原子力時代の形而上学」として提示した（しかし展開はしなかった）問題系を引き継ぎ、具体化させていったように思われる。また、こうしてハイデガ

ーとナンシー／デュピュイをつなぐ文脈を考えてみたとき、どうしても召喚しなければならないのはギンター・アンダースである。アンダースがヒロシマや核の問題を念頭におきつつ展開した「核時代における人間の地位」の思想は、今日もふたたびよみなおすべきものを有していると思われる。

アンダースは、なかでもアポカリプスに向う現代の社会を「誰も止めることができず、断崖で実際に破裂する前にすでに破局的な状態（カタストロフ）にあるソリ」に喩えていた。そこからすると、「カタストロフ」とは、従来、多かれ少なかれ悲劇的な帰結をもたらすような一回的な転覆的出来事とみなされることが多かったが、そうではなく、現代の社会そのものが「カタストロフ」のようなものとして構造化されているというふうを考えるべきではないだろうか。もしそうだとすれば、その状態をどう考えるかが3.11以降の社会哲学の課題であろうと思われる。

世代問題の再燃——3・11以後

森 一郎（東京女子大学・教授）

3・11の戦慄はわれわれを、あらたに思考することへと差し向ける。そこに浮上しつつある広大な問題群のうち、今回取り上げたいと思うのは、「世代」問題である。

宮城県沖で発生した大地震の引き起こした巨大津波のために、一方で、東北地方太平洋沿岸の町々が壊滅的被害を受けた。夥しい犠牲者を失った悲運から立ち直ることの困難さとともに、がれき処理をはじめとする被災地復興の困難さに、われわれは直面している。世代から世代へ受け継がれてきたふるさとを再建し、これからの世代にどのように受け渡してゆくか。ここに世代という問題が如実に現われる。他方で、東日本大震災がかき立てた戦慄の本体は、紛れもなく、原子力発電所の過酷事故の恐ろしさにあった。放射性物質による見えざる被曝の恐怖。原発周辺の住民たちの故郷喪失。そして、原発廃棄物の処理不可能性。プルトニウム - 二三九の半減期は二万四千年と言われるが、気の遠くなるほどのその永続性は、三十年単位の世代交替を優に超えて、種としての人類存続そのものの有限性を浮き立たせるに十分である。世代問題がここに再燃してくるのである。

では、「世代」という問題をわれわれはどう考えたらよいのだろうか。『存在と時間』の終盤近くの、歴史性を扱った章のなかに、「世代 (Generation)」という概念が出てくる。「共同運命 (Geschick)」や「民族 (Volk)」といった用語も一緒に持ち出される、いわくつきの箇所である。ハイデガー自身は、世代概念をディルタイから学んだと記している。ハイデガーと同時期に世代という問題に着目したのが、マンハイムである。ハイデガー、ディルタイ、マンハイムから影響を受けつつ、世代問題を独自に考察しようとしたのが、三木清である。そこには「新しく生まれること」の哲学の萌芽があり、アーレントの「出生性 (natality)」の思考に比肩されてよい。この系列とはまた別に、エリクソンにも世代論がある。世代、出生性、そして「世代産出性 (generativity)」は、教育哲学にとって重要であるのみならず、政治哲学の基本概念たりうる。のみならず、死と誕生、終わりと始まりを等根源的な主題に据えようとする新しい時間論を構想するうえでも、世代問題は必須のトピックとなろう。

だが、世代といったような「死を超えるもの」について論じようとする試みに対しては、えてして、過敏なまでの反感が示される。私がこの世界に存在しているという限界の外部に踏み出して語ることは、哲学的には無意味だとする反応がそれである。死んだら終わり式のこうした発想の根底にひそんでいる

のは、存在の偶然性に対する特定の感受性である。「ニヒリズム」の起源をめぐる系譜学的主題が、ここには横たわっている。3・11以後の哲学の可能性にとっての試金石も、ここに存しているように思われる。

この春就職した人から

大学に職を得て

赤石 憲昭（日本福祉大学）

一橋には、修士から数えて11年ちょっと在籍したことになります。去年6月になんとか博士論文を提出でき、今年の4月、ようやく日本福祉大学の子ども発達学部に就職することができました。キャンパスは、愛知県知多半島南方の美浜というところにあります。一時間に三本程度発着の駅を降り、田んぼの間を抜け、「福祉」という言葉を忘れてしまいそうなほど長い坂を上ったところに建物があり、研究室からはかすかに海も見えます。

子ども発達学部は、保育士や小学校教諭の養成をするところで、小学校や幼稚園に実習に行っている学生の訪問巡回といったこともさっそく経験することになりましたが、授業科目では、「哲学概論」、「哲学（現代人間論）」、「現代基礎教養」、「ジェンダー論」などこれまでに非常勤で担当していた科目と重なっているのので、自分の興味・関心やこれまでの経験を活かすことができ充実しています。ただ、長年、一橋の大学院生活が長かったので、1年生のゼミで近くの海に行ったり、ハロウィン・パーティーをしたりと勉強以外のことにも気を回さなければならなかったり、2年生の文献講読のゼミで担当者が平気で無断欠席をしたり、3年生のゼミでは受講生に合わせて保育や小学校教育について考えたりしなければならぬなど、戸惑うことも多々あります。

日本福祉大学には、学部は違いますが片山さんがいらっしゃるので、学校のことはもちろんのこと、生活全般に関してもいろいろとお世話になっています。こちらに来て哲学書を読むことはもちろんのこと、それを原典で読むという余裕はなかなか取れなかったのですが、最近、片山さんと週1回、ヘーゲルの精神哲学についての原書講読なども始めました。ヘーゲル研究者が複数在籍する環境というのは、考えてみればかなり貴重だと思いますので、片山さんとも協力しながら、ヘーゲル研究も進めていこうと思います。

私はもともと人間把握に興味があり、それをヘーゲルの論理学や法哲学に基づいて、近年では、ハーバースやホネットの批判的社会理論も援用しながら考えてきました。そのため、もともと純粹哲学というよりも社会哲学的志向が強かったのですが、今回、子ども発達学部という具体的に人間について研究する学部になつたので、具体的な議論も様々に学びながら、その一方で、理論的な探究もしっかり行っていければと考えています。現在は、知多半島にこもることが多くなりましたが、全国唯研等、学会などでお目にかかる機会も多々あると思います。今後ともご指導よろしく願いいたします。

一橋大学哲学・社会思想学会

研究発表募集のご案内

2014年夏学会の個人研究発表を下記の通り募集します。会員の皆様の日ごろの研究成果の発表の場として奮ってご応募ください。

【募集内容】

- 1) 第15回 (2014年6月7日予定) 学会の個人研究発表
- 2) 発表形式 Aタイプ: 90分 (発表時間45分、質疑応答時間45分)
Bタイプ: 60分 (発表時間30分、質疑応答時間30分)
いずれも、任意のテーマ。
- 3) 募集人数 若干名 (査読あり)
- 4) 募集期間 2014年1月27日 (月) ~ 2014年2月14 (金) まで
- 5) 応募資格 本学会会員に限る。

【応募方法】

発表希望者は、下記の必要事項を「学会発表申込書」としてA4用紙に記入、募集期間内に学会事務局までご提出ください (メールでの応募可)。

- 1) 氏名・フリガナ
- 2) 所属ゼミ (課程修了者は出身ゼミと現在の所属)
- 3) 発表タイトル
- 4) 発表要旨 (1200字以内)
- 5) 発表形式の希望 (AまたはB)

発表希望者は、Aタイプ または Bタイプのいずれかの発表時間を選択してご応募ください。ただし、当日のタイムテーブルの都合上、こちらで調整する場合があります。

- 6) 連絡先メールアドレス (メールを使用しない場合は、住所と電話番号)

【提出先】

学会事務局メールアドレス phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp または、下記へ郵送のこと
〒186-8601 国立市中2-1 一橋大学社会学部社会思想共同研究室気付け

【連絡先】 ☎042-580-8644 応募結果は3月中にお知らせします。

一橋大学哲学・社会思想学会事務局